

倉橋惣三の家庭教育論

—その近代的性格—

米村佳樹

(四国大学短期大学部)

1. はじめに

家庭教育は、倉橋惣三にとって幼稚園教育と並んで、重要な研究課題であった。彼は、幼稚園教育は、その本来の性質上家庭教育をモデルにし、家庭教育の精神及び方法を研究することから始めなければならないし、家庭教育学を知らずに出来ないと言っている。

本稿は、倉橋の家庭教育論の基底にある家族観・女性観・女性労働観と、家庭教育に関する本質論を分析することを通して、彼の家庭教育論の基本的な性格を究明することを目的としている。「家庭教育は、親としての実体験なしには、真実を語れるものではない」という彼の信念からか、家庭教育に関する彼のまとまった論稿が発表されたのは、二男一女（長男：大正2年、次男：大正5年、長女：大正8年）をもうけた後である。ちなみに、「家庭と家庭教育」（昭和3年）「家庭教育総説」（昭和6年）、「子どもと家庭教育」（昭和6年）、「家庭教育」（昭和7年）、「親と語る」（昭和8年）『育ての心』（昭和11年）、『家庭教育の本質と指導の要諦』（昭和11年）が発表されている。その他、様々な女性雑誌や育児雑誌にも、多くの家庭教育に関する論稿が見られる。以下、こうした論稿を手掛かりにして、倉橋の家庭教育の基底にある家族観・女性観・女性労働観とともに、家庭教育の本質論を考察する。

2. 倉橋の家族観・女性観・女子労働観

(1) 家族観

欧米では19世紀の中葉から20世紀の初めにかけて、都市化・工業化の進展に伴って近代的市民家族観が中産階級のみならず労働者階級の中にも次第に浸透してきた。この近代的市民家族観は公的な職業空間と対置される私的空間、家族相互の親密な交流、男女の性的役割分担、結婚動機としての愛情の重視などを主な特徴とするものであった。

では、倉橋の家庭教育論は、どのような家族観を基礎にしていたのだろうか。倉橋は、産業革命によって、「家庭外勤務とそれに伴う賃金制とを中心とする家庭生活が普通になって来た」という状況認識を持っていた。と同時に、夫は家庭の外で働き、妻は家庭で家事・育児に従事するといった性的役割分担を基盤とした近代的市民家族観を基本的に支持していた。また、彼は一夫一婦が本則となってから人間家庭としての基礎は確立されたと考えと共に、夫婦の愛情による結合の教育的意味を力説した。「人間としての此の相互の結合さへないところに、人間としての個をはぐくむ力がある筈はない」と。

このように倉橋は近代的市民家族の特徴である夫婦の愛情による結合と、家族の濃密な人間交渉に家庭教育の基盤を見

出した。

(2) 女性観

近代的市民家族観に連動して、新たに近代的女性観が中産階級を中心に次第に浸透してきた。この近代的女性観は、a. 家庭と世界の区分、b. 女性の適した領域としての家庭の指定、c. 女性の道徳的優秀性、d. 母親としての女性機能の理想化をその内容としていた。

さて、倉橋はどのような女性観をもっていたのであろうか。「母として我子の第一の主任者」となるべき身である、当時の高等女学校卒業生に教育に関する理解と見識が不足していることを嘆いて、倉橋は、「之れで良妻賢母の教育が出来て居ることかと、少からず憂ひとする少くないのです」と語った。彼は、基本的に女性の天職は良妻賢母であるとする女性観を是認していたが、とりわけ、「妊娠、育児に就ては永久に女性の仕事として与へられたものであって、是を何うするといふ事は出来ないのである」という考えをもっていた。このように倉橋は、女性の特質として出産・育児を強調する近代的女性観の上に立って、我が子の実際の世話には母親だけが味わえる喜びがあると語るとともに、自分の手で愛情をもって直接に我が子を世話しないで、他の召使等にさせている世の所謂裕福なる暇の多い母親に対して、言わば「頭と胸とのお母様」であると痛烈に批判した。

(3) 女性労働観

倉橋は、女子が職業によって経済的独立を実現し、社会的活動に参加するのは時代の自然の流れであると認識し、女性が母親にならずに、その才能を様々な分野で発揮する生き方も承認していた。但し、妻、殊に母が職業を持つことに対しては、彼は、「既に大きな人生的機能を持って居るのですから未婚者の場合の様に容易に賛成する事は出来ません」と原則的に反対した。そして賛成できる事例として、a. 家計上必要である時、b. 本人の特殊の学識、技能が社会にとって惜しいものである時、c. 職業の種類、および本人の能力によって主婦や母としての職能を確実に犠牲にせざる時、などを挙げた。

なお、倉橋は、家庭外勤務に伴い母子との交渉の機会が減ることになるが、かえって教育者としての母の機能が質的に強さを増すこともあることを認めていた。

3. 幼児期における家庭教育

子どもや家族の社会史の成果によると、近代的家族の登場は、子どもに対する感情の変化、子育ての大きな転換をもたらしたことを明らかにしている。子育ての近代性の一般的な指標として、①幼児期を固有な要求を持った時期としての認識、②親子の絆、③母親による母乳保育（母親中心の保育）、

④子どもを一人の個人と見なす、⑤情愛的かつ許容的子育て、などが挙げられている。以下、これらの指標を視野に入れながら、幼児期における家庭教育の本質に関する倉橋の見解を明らかにしたい。

（１）家庭教育と幼児期教育の本義

まず、倉橋は他のどんな教育も真似できない家庭教育の本義、本来の任務として、生の喜びを与えること、人生の現実性を養うこと、親が自分自身を与えることの三つを挙げた。特に人生の喜び、つまり生きていく愉快は、親の世話になって親と一緒に暮らすお陰で子どもの心にしみじみと感じられてくるものであると強調した。

次に彼は、大切な幼児期の教育の本義として、第一に発達時期に即すること、第二に根の教育であること、第三に外部の形よりも内の実質の教育であること、の三つにまとめている。発達時期に即するとは、幼児期を幼児期として充実させることである。教育は、子どもの発達時期に応じて、その教育目的のみならず、教育方法や教育的要求の質も異にする。幼児期は、幼児期の特性である、自己発達性と被教化性、自己統制力、人間性情を十分に発揮させねばならない。とりわけ、倉橋は自己発達を重視し、『育ての心』の中で、「自ら育つものを育てようとする心。それが育ての心である」と子育ての真諦を語っている。

（２）我が子の理解

「教育は勿論子どもへ向つてすることであるけれども、その本体は、どこまでも子どもである。子どもを中心とし、本位として、それに応じて行はれてゆかなければならない。そのために必要なことが、即我子の理解である」。このように語る倉橋は、家庭教育の対象である我が子の理解こそ、家庭教育の第一の責務であると断言した。

そして、倉橋は、子どもを理解する時に大切な二つの心理的要件を挙げた。その一つは、子どもは年齢によって異なる独自の心理を持っていることである。もう一つは、子どもは気質や知能の傾向や程度などが一人ひとり異なることである。倉橋は、「子どもは皆同じではない。健康にも智能にも、生れつきにも境遇にも、個々別々の相違があり、持ち前がある。それをお構ひなしに扱はれては、子どももさぞ面喰はざるを得まい」と述べている。

（３）親心の教育性

倉橋は、我が子に対する親心には、主として次のような教育性があると考えていた。第一は親と子の関係である。我が子を立派に育て、山の上にのせて望遠鏡で眺めていたいというのは本当の親心ではない。親心の真実、親子の「関係」をしっかりと捉えて、存分に楽しみたいと願っている。親はその心の奥深い所で我が子に対して絶対的な信頼を抱き、子どもは、親を信じ親を頼る。親は我が子を愛情をもって世話し、子どもの相手になってやる。こうして、親と子の心が結び付き、強い絆が生ずる。倉橋は、親と子が真に結び付いていることに、家庭教育の根本があると考えた。

第二は親は子どもを個として取扱う。つまり、親は絶対に我が子を個を正しく把握し、個として取り扱おうとする。絶対に個に即する親心は、他所の子との比較を超越している。親バカかもしれないが、我が子の鼻を垂らしている所、色の黒い所、やんちゃな所が何とも言えないのである。

第三に親は我が子に絶対の許しをもって対応している。倉橋は、「自分を変へることにばかり手伝つて呉れる人は、親切のやうなおせっかいの人である。自分を善かれ悪しかれ、それとして認めて呉れる人こそ、自分を生かして呉れる人でせう。つまり、許しです。その我が子に対して絶対の許し手であるところの親心に大きな教育が存するのであります」と述べている。

（４）母親中心の情愛的な家庭教育

倉橋、幼児教育の第一の場所を家庭にあるとするとともに、家庭教育の当事者として母親を中心に位置づけた。なぜ、家庭教育の中心は母親なのか。倉橋はその論拠を次のように述べている。第一に、家庭保育は「生活を共にしながら、その生活さながらの裡に実現してゆく教育」である以上、母親を中心にせざるを得ないからである。第二に、子どもは實際的に直接的に母親に育てられる体験を与えられることにより、結果的に父親よりも母親を求め、くっつくからである。

幼な子は、家庭において母親中心の教育を受けるが、その教育は情愛的なものである。情愛的とは、愛情豊かに子どもの感情や気持ちを考慮しながら教育することであるが、倉橋も、こうした情愛的な教育を説く。これは、彼の常用する「愛育」という言葉とともに、家庭教育の独特さをわが子の心もちを汲み取ることにあるとする彼の考えに端的に示されている。「日々に幼き子ども達に接して、その可愛さに触れ、単純さに救はれ、殊にその親しみに報はれて、愛育の喜びを、ふんだんに楽しみ得ることは、与ふるよりも受くるものの方が多い幸福である。」

なお、倉橋は、家庭教育における良夫の役割も重視していた。彼は「母をして真によき家庭教育を実現せしめ得るものは、恐らくや良夫の責任感でなければならぬ」と語るとともに、父親に対して心の大きさとどっしりした態度を期待していた。「父の存在は何も厳しさばかりのものではないのです。厳しさといふやうなことよりも、もっと大きな、包容とかいふか、頼らせるといふか、抱きはせずとも、うしろに立つとかいふやうな、どっしりと落ちつきを与える存在です」と。

４．おわりに

以上、倉橋の家庭教育論の基本的な性格を究明するために、彼の家族観と女性観、女性労働観のみならず、家庭教育の本質に関する彼の見解を分析してきた。その結果、彼の家庭教育論、及びその背後にある彼の家族観、女性観、女性労働観は、基本的に近代的性格を帯びていることが判明した。彼の家庭教育に関する本質論、とりわけ、我が子の理解や親心の教育性などについての卓見は、現代においても貴重な示唆に富むものである。